



Title	保護者でつなぐ台湾の日本語継承活動
Author(s)	服部, 美貴
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2024, 20周年記念特別号, p. 120-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102025
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

≪ Column 6 ≫

保護者でつなぐ台湾の日本語継承活動

キーワード：台北日本語授業校、継承語としての日本語、持続可能な学校運営、
Taipei Japanese Supplementary School、Japanese as a heritage
language、sustainable school management

持続可能な運営を目指して

世界各地の多くの補習校や継承日本語団体においては、運営基盤の強化と教師の確保は共通の課題である。台湾でも、我が子に日本語を継承する活動は保護者全員が学校運営も授業も保護者自身が無償で行う形態で、各地で行われている。家族の移動や子どもの卒業などで保護者が入れ替わっても活動が継続していけるよう、2011年に台湾継承日本語ネットワークが発足した。台湾の6都市で活動する日本語継承団体と台湾全国に400名余りの会員を持つ「居留問題を考える会」が構成メンバーで、定期的な年次会の開催と不定期の交流を行っている（服部, 2015）。

本稿では、台湾で活動の歴史が最も長く規模も最大の台北日本語授業校（Taipei Japanese Supplementary School 以下、TJSS）の、持続可能な活動を目指した運営の方策について述べる。TJSSは2001年1月に、数家族の台北在住日台国際結婚家庭の日本人の母子によって活動が開始された。毎週土曜日の午前、日本の国語の教科書を主な教材として2時間授業を行っている。2023年5月時点では幼児クラスから中学生クラスまでの約90名（約60家族）が学年別に学んでおり、その約9割は学習言語が中国語（台湾華語）の台湾の現地校に通っている。

大人の熱い部活

TJSSでは、保護者は自分の子どものクラスに属して教師役やその他の仕事を分担している。学校運営の中核を担う各委員会の委員長は、活動開始から10年余りは立ち上げメンバーや指名された保護者が務めてきたが、2012年度以降は各クラス（学年）から選出されるようになった。それは、保護者全員の参与意識を高めることに加え、何等かの事情で委員長を続けることが難しくなった場合でも他の保護者が代わりを務められるようにするためでもある。

TJSSの組織全体をまとめるリーダーである運営委員長は小5クラス、副委員長1名は小4クラス、もう1名の副委員長は小3クラスの保護者が務める。それらの保護者は子どもが小2の時にクラス内の協議を経て選出され、小3クラスの副委員長の時から2年間の見習い期間を経て運営委員長を1年間務めるというもので、退任した小6クラスの前年度運営委員長は相談役となる。教務正副委員長も同様のシステムを採っている。

それに加えて、既に子どもがTJSSを卒業した初代から第3代の運営委員長も、それぞれ「代表」「アドバイザー」として必要な時に現役の委員長たちを支えている。初代はTJSSの立ち上げ、第2代は内部の組織の整理、設立から10年を迎えた第3代は外部からの支援が強化された時期であった。運営形態も外部機関との連携も安定したと言える現在の状況の中で、このシステムは保護者の入れ替わりによる情報の断絶を防いで

いる。また、TJSS 保護者を対象にしたオンラインのプラットフォーム上での情報共有の他、年に数回保護者同士が交流する場を設け、縦横のつながりを作っている。

TJSS は 2013 年度より日本政府の援助対象校となっているが、教師役を含めた全ての保護者の TJSS への参与は無償であるため、教師の給与は発生していない。従って、年間の大部分の授業を行う市内の私立高校の教室借用料のみ日本政府の補助を受けている。

台湾には台北、台中、高雄に日本人学校があり、いずれも国際結婚家庭の割合が増えている。TJSS は台北日本人学校から年に 7、8 回の教室借用と同校教員による TJSS の児童生徒への授業、および年に 2 回の台北日本人学校教員と TJSS 保護者との懇談会という支援を受けている。これは保護者にとっても教師研修に代わる学びの機会になっているが、複言語で育つ子どもをモノリンガル基準で測ることにつながらないように留意したい。台北日本人学校の経営母体である台湾日本人会には TJSS の保護者全員が入会している。

ある年の運営委員長は、こうして保護者が支えてつなぐ TJSS を、「大人の熱い部活」と表現した。

活動四半世紀を迎えようとする中で

保護者全員が何等かの役割を必ず無償で担当するという方法は決して「楽」ではない。しかし、「楽しい」。「TJSS に入ると大変だよ」という声は現在に至るまで内外から聞く。

台湾では幅広い層で日本語学習が盛んで日本語に触れる機会も多い。TJSS が誰にとっても最適な学習の場というわけではない。ただ、ここに 10 年余り保護者として関わった筆者には、母娘それぞれが TJSS で得た学びと仲間はかけがえのない宝物となっている。

近年は日台家庭の日本人の父親の積極的な参与、日本人家庭、日本で生活経験のある台湾人家庭の子ども参加も増えている。また、親の介護や子どもの進学などの理由により義務教育期間中に日本に移住する家庭も珍しいことではない。つまり、日本につながる子どもの学校選択や帰国予定、更には保護者のライフコースは、企業駐在員や国際結婚、国籍などの背景では決められないというのが近年の傾向である。

活動開始から約四半世紀が経ち、既に家庭を持っている卒業生もいる。彼らが保護者として TJSS に参加する日も近いかもしれない。親子で成長するこのコミュニティが更に枝葉を広げ、ここで育つ親子を見守る存在になることを願っている。

引用文献

服部美貴 (2015)『台湾に生まれ育つ台日国際児のバイリンガリズム』臺大出版中心

服部 美貴 (台湾大学)